慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ケンペルの旅
Sub Title	Kaempfers Reise nach Edo
Author	柴田, 陽弘(Shibata, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.86, (2004. 6) ,p.99(276)- 108(267)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2003年度藝文学会シンポジウム 「Wish you were here! : ヨーロッパ文学と旅」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00860001-0108

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ケンペルの旅

柴田　陽弘

(一)

一口に旅といってもその形態は多様でさまざまな形があることはいうまでもない。ゲルマンの大移動から戦争による遠征もある。カエサルの『ガリア戦記』はその代表的な記録であった。20世紀前半まで庶民は軍人として移動することが唯一可能な旅の形態であった。[1] また宗教心に促された聖地巡礼も頻繁に行われた。中世の学生と職人の修業のための遍歴もある。職人の遍歴は今日でもヴァルツェという制度に残っている。厳しい条件下での遍歴修行に挑む若者がいまだにいるのである。15・16世紀のいわゆる大航海時代にはヨーロッパの民は果敢にアジアを目指した。[2] 17・18世紀には学術探検旅行が盛んになる。[3] 子午線一度の角度を測定するために探検隊を派遣することもあった。[4] 18世紀はグランド・ツアーの時代でもある。[5] イギリスの金持ちの子弟がヨーロッパの文化都市を経巡って見聞を広めた。18世紀はまた博物学の時代で珍品を求めてコレクターが世界各地に旅をした。リンネの弟子ツュンベリーが日本に来たのは時代の好奇心のたまものであった。[6] 19世紀にはいるとヨーロッパ列強は版図拡大を目指してアジア・アフリカに植民地獲得競争を繰り広げる。[7] この世紀は鉄道が普及した世紀でもあった。徒歩や馬による移動から鉄道への展開には飛躍的な心性の変化があった。[8] このころから20世紀にかけて次第に大衆観光旅行が始まる。トマス・クックに象徴される大衆旅行が盛んになるのである。[9] さらに20世紀も後半には宇宙旅行が始まる。人間は月を目指す。また火星も射程に入ってくる。[10] 海底地底探検の時代も近い。20世紀はフロイトに導かれて無意識の内面への旅も始まった。そして20世紀のもっとも悲劇的な旅といえば「アウシュヴィッツへの旅」であろう。強制収容所への死の旅路は人類が味わったことのない未曾有の悲劇であった。こうしていわゆ

る収容所文学が成立した。

(二)

本論では17世紀に日本にやってきたドイツ人、それもオランダ人になりすまして長崎は出島にやってきたオランダ商館付医師エンゲルベルト・ケンペルを取り上げる。[11] かれは1651年ドイツの北の町レムゴーに生まれた。この年、家綱が四代将軍になった。ハーメルンのラテン語学校を経て、リューネブルク、ダンツィヒ、リューベックで高等教育、トルン、クラカウ、ケーニヒスベルクの大学で医学等を学ぶ。綱吉が五代将軍に即位した1680年には、ケンペルはまだ大学生である。1683年にはスウェーデン王派遣の使節団に秘書官として加わり、ストックホルムからイスファハンへ向かう。モスクワでまだ少年だったピョートルに拝謁する。1684年、イスファハンに到着。同年12月、オランダ東インド会社に就職する。1685年にホルムズ湾沿岸のバンダル・アッバースに達する。1688年、インドのツチコリン、コーチンに滞在。1689年、バタヴィア着。1690年、オランダ船籍のワールストローム号で日本を目指す。途中、シャムに寄港する。9月、長崎湾に入港。9月25日に日本の土を踏む。ケンペルは博物学の時代にふさわしく好奇心にあふれた旅人であった。生涯にほぼ地球を1周しているのではあるまいか。

1691年2月13日オランダ商館長に随行して第56回の江戸参府旅行、3月13日江戸着。3月29日将軍綱吉に謁見。4月5日江戸を出立。5月7日長崎に帰着。翌1692年3月2日第57回の江戸参府旅行に出発。3月31日江戸。4月21日将軍に拝謁。4月24日別離の拝謁。4月27日江戸出立。5月21日長崎着。ケンペルはこの間の見聞を詳細に記録した。それが死後に『日本誌』として出版される。[12] 上巻の第1巻はバタヴィアからシャムを経由し日本の長崎にいたる道程の記述である。その途上でシャムの首府アユティアの王宮の見聞、シャム第1の大河メナムのこと、さらに日本への航海を叙述している。日本の地理的説明のあと、日本人の起源について、気候および地下資源、植物、鳥獣類、爬虫類、昆虫類、魚介類を詳細に記述し、ついで第2巻で

は政治事情を時代順に述べている。さらに第3巻では宗教が説明される。本書の下巻は第4巻と第5巻を含む。第4巻は長崎の町を詳述し、外国人の対日貿易の歴史を概観している。第5巻は本論の主題、江戸参府旅行の顛末である。ケンペルは2年強の日本滞在で2度も江戸と長崎を往復している。いずれも片道一月(ひとつき)ほどの旅であった。まず日本風の旅行とはいかなるものかを述べ、途中の陸路、海路の概略を説明し、街道筋の建築を描写し、駅舎、宿屋、料理屋、掛茶屋を観察し、往来の旅人たちとかれらを相手に生業(なりわい)を立てる人々に言及し、オランダ人の参府旅行について、またその道中で気づいた事柄について詳述している。その一つ一つがおもしろいのであるが、ここでは参府旅行の実態についてのみ紹介することにしよう。

(三)

参勤交代と同じように参府旅行の日取りは将軍の命によって指定されており、正月の15日か16日に出発することになっている。[13] 西洋暦では2月の何日かである。まず京、大阪の幕府筋に献上する贈物を念入りに荷造りしてから海上運搬に必要な物資を積み込む。船はもっぱら上り旅用に建造されたもので、2年ごとに張幕や調度品を飾り直さなくてはならない。陸路を行くわれわれを待つように船は下関に向けて先発させられる。下関からは海路で大阪まで航行するのである。さて出立の2～3日前に商館長は両奉行の元へ別れの挨拶に赴き、留守中、出島のオランダ人の保護をお願いする。翌日、荷担ぎ人夫や駄馬に運ばせる荷に中味と持主を記した木の名札を立てる。

出発の当日は出島の関係者と参府旅行随行者が早朝に集まってくる。両奉行あるいはその使者が慶賀の口上を述べるため盛装で登場する。朝食後、みな連れ立って出島から旅路に就く。時刻は9時と決まっている。商館長と付添検使は駕籠Norimonに乗り、大通詞は老年だと普通の駕籠に乗る。随行者はあるいは牽馬で、あるいは徒歩で行く。同行日本人の友人たちと日本人の雇人は次の宿場まで見送る。長崎から小倉までの九州陸路第1区間は馬方や案内人を含めて100人ほどである。海路の第2区間は船中水夫を

加えてほぼ同人数であるが、第3区間の江戸までの陸路は人馬で運ぶ荷が多いので150人に増える。荷は一行よりもたいてい1時間先行させる。

一日の旅程は長く、早朝から夕刻まで、時には夜までかかることもある。一日10里ないし13里歩く。海路では40海里を越えたことはない。道中のもてなしは、九州での方が本島よりも印象に残るものであった。他藩の領地に入ると饗応役の侍が通詞と付添検使に歓迎の口上を述べ、馬や荷担ぎ人夫を提供してくれ、オランダ人一人に四人の付き人を配置する。侍二人が先導して国境まで案内したうえ、一行の日本人に酒と肴を供してくれる。大村港と島原港の藩主二人は、藩主用の御座船と先導を提供し、温かい船料理を振舞ってくれた。かれらはこの饗応に謝礼を求めなかったが、抜け目ない通詞は勘定書をでっちあげ、われわれから費用を巻き上げた。道中では、往来の者は冠り物を脱ぎ、平身低頭し、土下座して敬意を表した。権威に対する諂(へつら)いの礼儀作法である。馬方や人夫の手配、宿屋、部屋割り、食事、身の回りの世話など、至れり尽くせりではあるが実に窮屈であるとケンペルは言っている。下馬するといやな顔をされ、行列も止まってしまう。トイレにまでつきまとうと嘆いている。一挙手一投足にまで監視の目が光っていたことが分かるのである。

付添検使は一行の指揮官であるが、前例を寸分たがわず踏襲しようと指令書を拳拳服膺する。融通が利かず、前年に泊まった宿に是が非でも泊まろうとし、天気にお構いなく苦行難行の旅を強行する馬鹿者もいる。宿舎は本陣である。オランダ東インド会社の幔幕を張って徽章をかけ、宿泊者が何者かを知らしめる。往路に昼食をとれば、復路には泊まるように按配して、宿に配慮する。割り当てられる部屋はいつも中庭に面した快適な最上の部屋で、雑駁(ざっぱく)な往来の喧騒は届かない。主人は村はずれか田圃のはずれまで出迎え、丁寧に深々と辞儀をして歓迎の意を表する。挨拶を済ますと、大急ぎで宿に戻り、また入り口で恭しく出迎えるのである。一向は到着するや否やただちに部屋に直行する。部屋の窓という窓はすべて釘づけしてあり、しっかりと看守されている。われわれに一番近い部屋に控えている町使や通詞や同心はつねに一行の行動に目を光らせ、だれも部屋に近

づけないように気を配っている。

あてがわれた部屋に入ると、主人は抹茶を捧げた番頭数人を引き連れふたたび挨拶にやって来る。平身低頭しながら、あ、あ、あと恐れ入った声を立てて恭しく茶をすすめる。いずれも裃の礼服に短刀を差し、逗留中はこの服装を崩さない。茶のあとは喫煙道具が登場する。小さな火鉢、痰壷、刻みタバコの小箱、長柄の煙管2～3本を鉢か盆に載せて運んでくる。菓子、果物も木皿か漆器の銘々皿に載せて持ってくる。イチジク、胡桃、饅頭Mansjo、煎餅、塩茹でした草根類、砂糖菓子等である。まず検使の部屋へ運ばれてから、われわれの部屋に運ばれる。

随行の日本人は日に3度食事をするほかに間食もする。起床してすぐに第1食をとり、2食めは正午に、第3食は就寝前にとる。食後に酒を飲みながら歌ったり、碁や将棋をしたり、なぞなぞ合わせをして過ごし、負けると罰に一杯飲まされる。オランダ人は連れている料理人（日本人）に調理させ、葡萄酒のほかにときどき日本酒を試したりする。

出立前に通詞の面前で宿の支払いが行われる。商館長が盆に載せて金貨を渡す。主人は平身低頭して床に額をすりつけながら畏まって、あ、あ、あと感謝の意を表す。昼食をとる宿では小判2枚、夜食と宿泊の宿には小判3枚が相場である。これが全員の賄い代になる。炊事に必要な物資はすべて同行の料理人が調達するためもあってか、主人に特別の心づけをすることはない。宿を出立するときは召使に掃除をさせるのが礼儀である。

日本人の挙措はおおむね慇懃鄭重であるが、長崎から同行してきた「虫けら」どもは別だとケンペルは記し、さらに日本人は思慮深く、好奇心に富み、外国のものを尊重する。例外はあるにせよ、異国人を慈しむこと掌中の珠のようである。唐人と混同して揶揄する者もいないではなかったが、と書いている。

ケンペルは道中の支出の明細も残している。街道沿いの宿代が一日50ライヒスターラー×2ヶ月分で3000ライヒスターラー、大阪と江戸の荷物運搬費を馬40頭×15両、人夫40人×6両として3000ライヒスターラーというように細かく計算している。長崎の両奉行に贈った生絹代を含めて江戸参

府旅行の総費用の合計を2万ライヒスターラーと算出している。

ケンペルの好奇心はとどまるところを知らず、天文学に通じた運勢占者の安部晴明考案の旅行忌日表まで掲げている。(14)

(四)

ここでは江戸でのケンペルの見聞に目を向けてみたい。

ケンペルはまず江戸の地理と地勢を記し、住民や家屋、街路の様子を詳細に記述する。将軍の居城についてもその構造と内部の間取りが詳しく描写される。次いで江戸滞在中の体験が語られる。宿に着くと小通詞を通じて作事奉行（二名）と江戸詰めの長崎奉行に到着を知らせる。われわれは宿の離れ座敷にだれも近づけないように隔離された。長崎奉行の指令で、将軍に謁見するまで何人も一行以外の人は部屋への立ち入りを許さぬとのことである。数日は贈物の準備に過ごした。葡萄酒の容器を注文したり、沈香や樟脳をいれる小箱を作らせ、進物を万事万端ととのえた。この数日の間に江戸では毎日のように火事がある。小火ですんだものもあるが、25ケ町600軒の人家を焼く放火事件があった。3月25日に将軍の寵臣である牧野備後守からオランダのチーズがほしいとの申し入れがあり、丸のままのエダム・チーズとサフラン・チーズを贈った。25日、将軍への献上品、幕府の大官に送る進物を分類し、順序を決めた。ここでケンペルは、進物を贈るか挨拶すべき大官の一覧表を掲げている。御老中、若御老中、寺社奉行、作事奉行、肥前平戸の藩主、江戸町奉行、長崎奉行の総勢20人である。

さていよいよ28日になった。作事奉行両名と長崎奉行（摂津守）から、明日は将軍に拝謁することになったから、早朝に伺候し、大番所にて沙汰を待つように、との指示が届く。献上品は作事奉行の代理と摂津守の代理の手で城中へ運び込まれ、謁見の大広間に足つき台に載せて並べられた。一行は礼装に身を包み、黒い絹のマントをはおり、行列をつくって行進した。真鍮の擬宝珠のついた大橋を渡り、城郭の入り口の二重の門をとおり、立派な広場を横切り、将軍の居城である本丸に入った。しばらく百人番と

いう番所で待たされたあと、天井の高い薄暗い控えの間に1時間着座していた。その間に将軍は御座所に就き、作事奉行と長崎奉行がカピタンを招じ入れ、謁見の間へ先導した。ケンペルたちはその場に残された。「オランダ・カピタン」と呼び上げる大声が聞こえ、これを合図に表敬の礼が行われる。カピタンは膝行して進み、額がつくほど畳にひれ伏し、口はきかず、ふたたび蟹のようにいざりながら後退する。念には念を入れて準備した謁見の儀はあっけなく済んでしまった。謁見の間には玉座も階段もない。壁掛けも円柱もない。およそ100畳敷きの美しい部屋である。将軍の姿は広間からはよく見えない。また頭を上げて仰ぎ見ることも許されないのである。かつてのしきたりは変化して、現在ではカピタンの随行者も謁見後に将軍の奥方や姫君などに挨拶できるようになった。将軍は婦人たちと御簾の蔭にい、老中などの高官連は周囲に居並んでいる。ケンペルが将軍の命により踊ったとき、御簾がゆれて奥方の顔が垣間見えた。小麦色の丸顔の大きな黒目の美しい方であるという印象をもった。

将軍の命をうけて備後守が歓迎の辞を述べ、カピタンが恭順の式辞と自由貿易の認可に対し感謝を述べた。通詞は顔を床に擦り付けつつ声を張り上げ通訳をした。備後守は将軍から答辞と談話を聞くと、それを通詞に伝え、通詞はオランダ人に伝えた。あとは茶番狂言だとケンペルは記している。それぞれ年齢、名前を聞かれ、各自がヨーロッパの文具で紙に記して備後守に渡す。備後守が御簾の下から紙片を差し出す。ケンペルへの質問は、もっとも重篤な病気は何か、癌腫瘍や体内の潰瘍の治療法、不老長寿の薬を探したことがあるか、その種の薬の発見者はいるか、などである。将軍は不老長寿に関心があるとみえ、さかんに質問を重ねる。現在もっともよいとされる薬はサル・ヴォラティレ・オレオスム・シルヴィである、ともったいをつけると、御簾のむこうで書き取る気配がした。それを実際に入手できるかと訊かれ、できると答えると、見本を送らせるようにとの仰せである。興に乗った将軍は思いつくまま色々な注文を出したので、命ぜられるままに猿芝居を演じなければならなかった。歩いて見せたり、酔っ払いの真似をしたり、片言の日本語を話したり、ドイツの恋歌を歌っ

たりした。カピタンは真面目で神経質で馬鹿ふざけができない性格だったが、幸いにもこの芸当から免れられた。2時間も体のいい見世物になったが、そのあと日本料理のお膳を茶坊主が運んできた。箸が添えてあったが、われわれはほとんど食べなかった。食べ残しは老通詞が持ち去った。そのあとは幕府高官に届ける進物の贈呈の次第が詳しく語られる。われわれはその記述から江戸時代の礼式の一端を知ることができるのである。

(五)

謁見の場でケンペルが歌った歌の歌詞が残っている。

大地の極みまで
守るべきわが務めを思う。
こよなく美しき、心乱るるまでに恋しき
君に誠を捧げて悔ゆることなし。
わが命の限り、
わが誠、永久に変わらじ。[15]

平凡な恋歌であるが、江戸城の大奥で、将軍綱吉とお女中の面前で、しかもドイツ語で歌ったというのであるから、その情景を想像するだけでおかしい。反応はどうだったのだろう。呆気にとられた人々の表情が目に浮かぶ。

上述のようにケンペルの紀行文には17世紀末の武家や町人が当然のこととしていた儀礼や習慣がことこまかに書き記されている。日本人にはあまりに当たり前すぎて記述することのなかった日常、非日常の節々が細密に記録されている。江戸時代を追体験するに格好の資料であることはいうまでもない。『日本誌』は庶民や武士の日常史であり、心性史である。そこには後世にエドワード・サイードが、あるいはタラル・アサドが問題視するような支配者の視点はそれほど濃厚ではない。[16] ケンペルは自然科学者らしくきわめて淡々と見聞した事実だけを記述しようと努め、極力、主観

的な感想を排除しているからである。また将軍綱吉に対する個人的な好感も働いてか、徳川の諸制度を賛美することが多い。最近では「生類憐れみの令」を社会福祉の観点から評価し、弱者救済と公衆衛生の面からみて傑出した法であると評価する論述もある。[17] これは長い間、悪法の施行者にして圧制者とされてきた綱吉を再評価しようとするものであり、ケンペルの判断を支持するものでもある。またケンペルは鎖国も日本の立場からはやむなしと肯定した。[18] ひとりの統治者の最高意思によって支配されている国家を評価する立場から、ケンペルは綱吉を名君と讃えた。ところが18世紀末から19世紀にかけて植民地獲得競争が激化すると、そのような国家は専制国家とみなされるようになる。この観点からすれば綱吉は専制君主である。カントが『永遠の平和のために』で日本を理想国家としたのは、行ったこともない日本のイメージをケンペルの著作に負っているからであった。その点でアサドやサイードが非難する非西洋の視点はケンペルには濃厚ではない。東洋と西洋は本質的に違うのだという存在論的認識は当然あり、異質の空間に身をおいてその一部始終を西洋との対比で描こうとした。このような博物学者の視点に政治がからまると西洋の制度で非西洋を眺めようとする傾向が強まるのであろう。ケンペルはその意味で危ういところにいる。やがて西洋の地理的拡張の欲望、人種差別主義、自国中心主義が支配様式の側面を露呈すると、東洋に対する肯定的楽観的評価が逆転するからである。

注

(1) エリック・リード『旅の思想史』法政大学出版局　1993
(2) 『大航海時代叢書』概説年表索引　岩波書店　1970
(3) 『17・18世紀大旅行叢書』岩波書店　1990
(4) フロランス・トリストラム『地球を測った男たち』リブロポート　1983
(5) 本城靖久『グランド・ツアー』中公新書　1993
(6) 松永俊男『博物学の欲望』講談社現代選書　1992
白旗洋三郎『プラントハンター』講談社選書メチエ　1994
西村三郎『リンネとその使徒たち』人文書院　1989　etc.

(7)　エドワード・サイード『オリエンタリズム』平凡社　1986
(8)　ヴォルフガング・シベルブシュ『鉄道旅行の歴史』法政大学出版局　1982
(9)　ジョン・アーリ『観光のまなざし』法政大学出版局　1993
荒俣宏『地球観光旅行』角川選書　1993
ピアーズ・ブレンドン『トマス・クック物語』中央公論社1995
本城靖久『トーマス・クックの旅』講談社現代新書　1996　etc.
(10)　ジュール・ヴェルヌ『月世界旅行』ちくま文庫　1999
ポール・ヴィリリオ『ネガティヴ・ホライズン』産業図書　2003
アーサー・C・クラーク『地球幼年期の終わり』創元SF文庫　1969
アーサー・C・クラーク『2001年宇宙の旅』ハヤカワ文庫　1993
(11)　B・M・ボダルト＝ベイリー『ケンペルと徳川綱吉』中公新書　1994
ベアトリス・M・ボダルト＝ベイリー『遥かなる目的地　ケンペルと徳川日本の出会い』大阪大学出版会　1999
ヨーゼフ・クライナー『ケンペルのみたトクガワ・ジャパン』六興出版　1992
(12)　エンゲルベルト・ケンペル『日本誌』上下　霞ヶ関出版株式会社　1973
Engelbert Kaempfer:Geschichte und Beschreibung von Japan. Stuttgart 1964
(13)　ケンペル『日本誌』下巻　p.196ff.
(14)　ケンペル『日本誌』下巻　p.203
(15)　ケンペル『日本誌』下巻　p.319
(16)　エドワード・サイード『オリエンタリズム』平凡社　1986
「大航海」1996.11　特集「オリエンタリズム再考」
タラル・アサド『宗教の系譜』岩波書店　2004
(17)　前掲書『遥かなる目的地』p.ii
(18)　紙屋敦之ほか編『海禁と鎖国』東京堂出版　2002
荒野泰典『「鎖国」を見直す』川崎生涯学習事業団　2003